



令和元年度
文化庁日本語教育大会・京都大会
パネルディスカッション
2019年10月12日（京都工芸繊維大学）

アーミーナイフとしてのCEFR: 充実した機能と実際の運用

西山教行(京都大学)

1

CEFRに関する基本的知識

- 2001年に欧州評議会が公開
 - 欧州連合とは異なる国際組織
- 1960年以降の欧州評議会の言語教育政策の集大成
- 2015年までに、**39言語**の版が公開
- **各国の教育機関の協力**を促進する
 - 語学学校, 初等, 中等, 高等教育の留学や交流の推進
- 言語教育における**各国の評価を相互承認**するための基盤
 - 各種の民間試験の能力基準の参考
- 学習者, 教師, カリキュラム編成者など教育関係者がそれぞれの**行動の位置づけ**を助ける
 - 共通参照レベルと例示的能力記述文

2

欧州評議会による言語教育政策

- 多言語主義
 - ヨーロッパ市民は複数の言語によるコミュニケーション能力を獲得する
- 言語的多様性
 - 多言語状態にあるヨーロッパにおいて、すべての言語は等しい価値を持つ
- 相互理解
 - 言語教育は相互文化的コミュニケーションと文化的差異の承認にかかわる
- 民主的市民権
 - 市民の多言語能力により、多言語社会の民主化、社会化に関与する
- 社会統合
 - 言語学習は、個人の発展、教育、雇用、移動などの機会均等を確保する

3

「ヨーロッパ」に関わる『参照枠』

- 例示的能力記述文は、スイスの語学学校で、英語、ドイツ語、フランス語を学ぶ学習者のデータをもとに作成
- 一義的には、ヨーロッパ系言語を想定されている
- ヨーロッパ諸国で実施されている言語教育に関係する
 - ヨーロッパで教育されている日本語、中国語も実質的には対象となる
- ヨーロッパ域外に活用されることは想定外
- CEFRを個別言語に対応させるためには、レベル別個別言語資料集が必要(English profile, Référentiel, Profile deutschなど)
 - 日本語のレベル別個別言語資料集は存在しない

4

「共通」を特色とするCEFR(ヨーロッパ言語**共通**参照枠)

- 言語横断性
 - 特定の個別言語のために作られた能力レベルの記述ではない(共通参照レベル)
- 学校横断型
 - **一つの学校(機関)のために**作られた能力レベルではない
- 教育課程横断型
 - **複数の教育課程**に使用可能(初等教育, 中等教育, 高等教育, 成人教育など)
- 越境型教育
 - ヨーロッパ各国に共通の指標

5

共通参照レベルと例示的能力記述文(can do)

- 学習者が言語学習をすすめるうえの**俯瞰図**(マッピング)
- 共通参照レベルは**到達目標ではない**
- 複数言語の能力を**技能別に評価**することを可能にする
 - 部分能力の承認
- 共通参照レベルを絶対視して能力を測るのではなく, 共通参照レベルを「参考にする」
- 言語使用を**行動に結びつける**ための例示的能力記述文(行動中心主義)
 - 言語＝能力の視点を強調
 - 言語知識の獲得ではない

6

複言語・複文化主義

- 複数言語を複層的に運用できる能力
 - バイリンガル能力は複言語能力の一種類
 - 能力としての複言語主義
- 個人内部における複数言語の共存状態
 - 多言語主義(状態)＝社会における複数言語の共存
- 「コミュニケーションのために複数の言語を用いて異文化間の交流に参加できる能力のことをいい、一人一人が社会的存在として複数の言語に、すべて同じようにとはいわないまでも、習熟し、複数の文化での経験を有する状態」
- 言語教育の表象(イメージ, 偏見など)について働きかける教育
 - 価値としての複言語主義

7

CEFRから着想する日本語教育

- 複数言語に共通の枠組みと連携
 - 教授法, 評価, 学習法など
 - 英語教育など他の言語教育に連携する言語教育
- 複言語教育の可能性
 - 学習者の母語などの活用と連携
 - 複数の言語を知れば, 自民族中心主義を克服しやすくなり, 同時に学習能力も豊かになる。(p. 148)
- 学習者の言語教育・学習に働きかける教育
- CEFRをモデルとして現場の教育を改革するのではなく, 現場の教育にあわせてCEFRを参照する

8